

参加型・機能的識字学習と女性の自立

——パキスタンの場合——

國 信 潤 子

日本社会では女性が学校教育を修了したあとも、仕事をし、家庭を持ちつつ学習することは当然と思われている。その内容はさまざまで、趣味活動、実用情報学習から技能訓練、資格取得、さらには社会問題学習と多様である。とかく趣味などに偏り、国際的課題としてのジェンダー、環境、教育などの問題を理解する生涯学習は比較的少ないのが実態である。日本の生涯学習、社会教育、成人教育、呼び方はいろいろだが、グローバルな視点があるかという、どうも視線は個人の身の回りの関心事、楽しみの方に集中しているようだ。

開発途上国の状況に視野をひろげ、なかでも女性の立場を理解するための社会教育領域はまだ不足している。例えば開発途上国においては5歳までの女児死亡率は男児より高く、女性識字率は男性より低く、女性の低賃金は世界的に共通していることなどである。また女性役割とされる家事、育児、介護などの無償労働が女性の地位低下と連動している。これらの現実を知る機会は少ない。もしこうしたことを知る機会があれば、当然、なぜそうなるのかという社会背景に目が向くだろう。これらの実態を理解することは、日本社会のジェンダー関係アンバランスの歴史的背景を理解することにもなるはずだ。

私はここ15年程、アジア南太平洋成人教育協議会（Asian South Pacific Bureau of Adult Education：ASPBAE＝アスベ、本部インド、ムンバイ）という組織に所属し、女性教育推進を中心に活動してきた。この組織は、国連経済社会理事会への協議資格を持つ国際的NGOであり、生涯学習、成人教育、市民社会教育を活動趣旨としている。設立は1964年であり、40年に及ぶ歴史をもつ組織として成人教育領域の人々の間ではよく知られている。また、ASPBAEはユネスコ傘下で生涯学習推進に貢献し、成人教育領域の国際的政策提言を積極的におこなっている。この組織において女性と開発途上国の農村女性の成人教育に関わる活動が積極的に実施され、その実態を私も現場で経験することができた。その事例を紹介しつつ、成人女性が学習することによってどのような意識の変革が生じるのかを考えてみる。

1998年にパキスタンの農村社会で女性に識字教育、収入創出技能研修をするプログラムを実施することになり、現地の女性NGOとASPBAEの共同事業として活動開始した。その地域の女性が学習に対してもっている感想を聞くと、皆が「忙しい」、「時間がない」、「学習して何の得があるのかわからない」という回答がくる。また「学習というのは子どもが学校でやること」とはいうが、「自分は行く暇がない」とまずいう。こうした現状を打破する契機は、学習がいったい女性にとってどのようなメリットをもたらすのか、という点を説得することにある。学習し、文字が読めるようになるというだけでは不十分である。彼女たちは何か役に立つ技能、収入がすぐ得られる作業を学びたいという。あるいはマイクロ・クレジットなどのグループに参加でき、仕事の口がそこから創りだせるなら是非参加したいという。参加者が主体的に意欲をもって、関心をもって参加しない成人教育というのは持続性がない。

とかく先進国の開発専門家主導の事業はまず識字教育だ、というので成人教育で文字が読めるようになれば、そこから何か広がりがあるという考えで実施される。実用的内容のテキストではあってもその村のそのときの話題、ニーズ、自然環境などは教材にないために、興味をもたれず、他人ごとのようにとられてしまい、学習効果もあがらない。

このようなプログラムが多いということは、現地の人々の逼迫した生活の実態を知らない立案者がいるためである。ある農村の男女の生活構造調査をみると日の出前から始まる水汲み、家族7～8人の食事づくり、燃料となる小枝集め、料理、掃除、洗濯、幼児の世話、夫の世話、さらには小さい子どもを引き連れながらの農作業と



副業など息つく暇もない日程を女性たちはこなしている。学習時間捻出は正味、至難なのだ。ネパールの山間部で女性の生活を知るために既婚女性に彼女の一日を尋ねると、うまく説明してくれなかった。その理由は彼女たちいわく、「私たちは腕時計をもっていないからねー」の一言だった。つまり生活は時計で測っているわけではない。また距離も何キロという概念はない。「ニワトリの声で目がさめて、お日さんが上にあるときに畑にでて、収穫して日暮れまでに……」という具合だった。急な豪雨なども敏感に察知し、対応を自然にしていた。歩く速度も早く、急な山道を大きなカゴを背負い、ゴムゾウリ一つで足早に上り下りする。つまり、自然の変化を体感し、予測を立て、動かなければ命に関わるというわけだ。

そういう女性が夫に遠慮しながら子どもを夫や姑に任せて、近所の学習場にててくるとしたらどのような条件が必要だろうか？ 仕事の後、夕暮れ2時間くらいはとれないか？ しかし、農村の夜道は漆黒の闇、徒歩以外には移動手段がない。さらに夜、女性が出歩くことなど想像もできないという慣習もある。となると日中か？ 農業は自然が相手、待ってもらえない。そこで農閑期、あるいは雨季、農作業がすいている時期しかない。こうして日中の農作業が比較的ラクな期間に女性のグループのリーダーたちがその地域に出向き、集会場、それがなければ野原での学習となる。しかも中身は参加者が何か自分にメリットが短期的にあると了解した知識、情報を適切に提供できることが要件となる。共同体内のクチコミの効力はすごい。なぜか翌日には昨日のできごとを村人皆知っている。つまり、情報伝達手段はある。好奇心もモリモリなのだ。

このような共同体の生活、自然環境、人間関係を熟知している努力家の地元女性こそが、リーダーとなるべきなのだ。外部、ましてや外国からきた知識人が講義などしても1回くらいはお付き合いで聞いてくれるかもしれないが、次からはもう継続不可能になる。参加女性たちが自分でこれを学びたい、この技術を教えてくれという内容を組み込むことが必須となる。

しかも、学習によって目標達成できたかどうか、成功したかどうかを仲間同士でワイワイいいながらお茶でも飲みながら、本音で話せる場が必要だ。正式な教室などで外国人の講師が前にたって、通訳つきで感想をきいても、建前の賞賛のことばのみだ。誰かがやってくれる、何かをもらえる、あるいは雑談して終わりという学習会は決して継続できない。

パキスタンのプログラムは最初、非識字女性を中心に形成されたが、技能研修となるとさらに多くの女性が参加を希望することになり、識字能力はすでにある女性たちも参加可能とした。こうなると女性の間の格差意識も複雑に絡んでくることを配慮しなければならない。なによりも重視されるべきは参加女性のニーズを正確に聞き取り、それにできる限り誠実に沿うこと、しかも地域の女性たちが「自分たちが創ったプログラムだ」という所有感覚をもてることが、成人女性学習の成功の秘訣となる。

さて、パキスタン、パンジャブ地方でブンヤドという女性民間組織が ASPBAE の支援を得て、地域女性たちと協力して作成した成人学習プログラムの内容とは次のようなものだった。パンジャブ地方というのは人口密度が高く、最も貧困者人口も高い。ある地域では女性の識字率は9%、結核が蔓延し、乳幼児死亡率も極めて高い。宗教上の慣習から家族計画は実施できないために人口の急増、貧困の深刻化がある。そこでこのプログラム開始以前はまず、全国統計でなく、その特定地域の性別区分統計の収集が基本である。人口、年齢構成、健康状態、教育レベル、識字レベル、家庭内役割、収入レベルなどの既存のものがあればそれを応用し、ラフではあるがベースライン調査が実施された。

次いで、地域の女性たちの関心を集められる内容の基本方針を公表した。まず、女性の収入レベルの向上を目指すこと、自営業の機会を創る、自主管理で農村女性のためのマイクロ・クレジット・プログラムを組む、ジェンダー間の問題を認識できるようにする、地域の女性にリーダーを育てるという基本方針を公表し、これらは、多くの女性たちの興味を引き、うわさが広がり、好奇心を掻き立てた。こうした地域では隣同士のことは実によく知っている。

学習プログラム実施組織もつくり、図式化し説明した。9人からなるその組織でその地域の外部の人は3人のみであった。現地での人員確保が重要であり、適切な人柄であるかどうかはその後の進展を決定づける。

ここではすべての過程を紹介する余裕はないが、学習内容は識字の基礎4カ月、それも地域の政府機関の担当



職員の了解と協力を得て実施された。場所提供なども受けることができた。参加者 25 名、年齢は 15～25 歳の女性であった。教材提供はユネスコの学習センターからもあった。一日 2～3 時間、週 6 日間で密度の高い内容で実施された。レベル分けもされ、習得度に応じてテストも実施された。初級、中級、自主学習レベルの三段階である。テキスト内容は、「自分は誰？」からはじまり、女性の自信、女性と法律、羊の種類分け、動物の病気とその治療、有機農業、栄養のあるよい食物……など実に実践的で今日すぐ役に立つというものである。こうした学習内容を Functional Literacy：機能的識字能力と呼ぶ。

結果としてこのプログラムは好評を得、ASPBAE のプログラムのなかでもお手本とされた。女性たちは学習したことによって、読むことの面白さを知り、子どもにも絵本などで教育を自分でするようになり、学習センターにある図書コーナーに子どもをつれて時間のあるときに自主的に立ち寄るようにもなった。また手芸、裁縫、工芸品、家畜飼育、農作業の改善などが活性化し、次回もまたもっと継続してくれという声が多く聞かれた。

このような学習機会は地域の女性にとって稀有なものであるが、組織作りの契機、教材、時間確保、学習場所など条件がそろえば、どこでも実施でき、課程を修了したときに証書をもらえることは大きな誇り、喜びとなっている。決して豪華なビルなどはいらない、必要なのは参加型学習、地域のニーズ聴取、地域リーダー探し、地元密着型教材などがあれば、成功するし、ほぼ目標は達成できる。男性たちも大いに満足し、支援をしてくれたことも重要な要因であった。

(くにのぶ・じゅんこ 愛知淑徳大学ビジネス学部大学院教授)